

ここで歴史をもう一度戦前の日中関係に戻して、日中戦争の中であって活躍したエスペランティストについて語りましょう。その名は長谷川テルという女性です。テルはエスペラントに関心ある人たちの中では、その名を知る人はいるでしょうが、一般的には、その存在を認識している人はほとんどいないでしょう。しかし長谷川テルは、ザメンホフが言う人類人主義を文字通り実践し活動したエスペランティストでした。テルこそ、真にエスペランティストの名前に値する人だと私は思います。

▶ 日中間の不穏の中、中国に渡る

長谷川テルは、1912年(明治45年)3月、山梨県の猿橋(現在、大月市)に生まれました。その後一家は東京に移り、テルは東京府立第三高女に入り、奈良女子師範学校の国文科に進学しました。今の奈良女子大学です。

世界では年ごとに不穏な動きが広がっていました。1931年9月18日、柳条湖事件が起きました。“満洲”と呼ばれていた中国東北部にいた日本の関東軍は、瀋陽北方の柳条湖付近で、中国軍が“満鉄線”を爆破したとして一斉に攻撃を開始しました。しかしこれは関東軍の自作自演でした。関東軍は翌日までに満鉄沿線の主要都市を占領しました。日本ではこの事件を満洲“事変”というような言い換えをして本質を隠しています。

この事件こそ、〈日中15年戦争〉の起点になった事件でした。私は数年前、柳条湖に行きましたが、そこには歴史博物館が建ち、その正面の壁面には江沢民の字で、〈9・18を忘れるな〉と大きく記されていました。

日本は翌年には、“満洲国”を建国しました。テルはこのような時期に青春を過ごしました。奈良女高師に入学したばかりのクラスには中国からの留学生

が10人ほどいましたが、彼女たちは中国に帰ってしまいました。

その頃テルはエスペラントを学び始めました。宮武正道という人が指導者でした。彼は生涯、在野にあってマレー語やタガログ語などの南洋語、南洋文学の研究者であり、奈良エスペラント会の創始者でした。そしてテルは、日本プロレタリア文化連盟と接触、そのメンバーは検挙され、テルも警察に連行され、退学させられました。

東京に戻ったテルは、エスペラントを通じて劉仁という東京高等師範学校(現在の筑波大学)に留学していた中国人青年と知り合いました。劉仁は“満洲国”からの官費留学生でしたが、彼はザメンホフの人類人主義を信奉するエスペランティストでした。二人は友情を結び、恋愛し結婚しました。テルは父親の大反対を押し切り結婚したのです。

日中戦争という言葉はまだありませんでしたが、太平を謳歌する時代ではありません。劉仁は中国に戻ります。しかし故郷である中国東北(“満洲国”)の本溪に戻らず、上海に渡りました。その後テルも上海へ渡りました。1937年の4月、盧溝橋事件の3か月前のことでした。

先に15年戦争と呼びましたが、これは鶴見俊輔が、満洲事変から支那事変、大

東亜戦争を一連の歴史過程として捉えて、日本の中国に対する戦争責任を明らかにしたいという思いを込めて名付けました。しかし、それまでは日中間に大規模な戦いがなかったことから、この盧溝橋事件を日中戦争の始まりと位置付ける知識人がいます。ともあれ、日中間の本格的な戦争が始まる寸前にテル夫婦は、日本を離れて中国大陸に渡ったのです。

▶ エスペラントを使って闘うテル

1937年4月15日、テルは上海に降り立ちました。埠頭には劉仁が待っていました。上海ですぐ目

第八回 エスペランティスト長谷川テルの人生
「私は人類の一員だ！」

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

にしたのは近代的なビル群、そして上半身裸の苦力(クーリー)の男たちの姿でした。

テルと劉仁はフランス租界に部屋を借りて住みました。中国と戦争状態にある日本の婦人であることを隠すために、劉仁と友人たちはテルをマレー生まれの華僑で、今回初めて中国に帰ってきた女性であり、マレー語しか話せない、ということにしました。そのマレー語とはエスペラントです。

劉仁と友人が時局問題などのパンフレットを出す仕事場に行くと、テルは家主の家の小さい娘たちと遊ぶ以外はすることがなく退屈な毎日でした。孤独でもありましたが唯一の憩いの場所が共同租界にある上海世界語者協会、エスペラント協会でした。テルは時々ここを訪れ、日本から持参したタイプライターを持ってきてエスペラントの雑誌「中国は吼える」(チニーオ・フルラス)の刊行を手伝いました。

盧溝橋事件から1週間後の7月15日、上海世界語者協会は、エスペラント運動50年を祝う記念集会を開催、テルも劉仁と一緒に参加しました。そこには300人以上の同志たちが集まりました。「エスペラントを使って中国解放のために」という上海世界語者協会のスローガンの下、集まった同志たちはエスペラント語で「ラ・エスペーロ」(希望)、「ラ・タギージョ」(あかつき)というエスペラントの歌を唄いました。

中国のエスペランティストたちは中国語で「義勇軍行進曲」を唄いました。この作品は劇作家である田漢が作詞し、聶耳ニエアルが作曲したものです。この歌は、戦争中に中国人民の間で広く歌われ、新中国になって国歌として制定されました。聶耳は1935年、ヨーロッパへ行く途中に日本に立ち寄りしましたが、鵠沼海岸で水死しました。田漢は1916年に日本に留学し、郭沫若らと行動を共にしました。が、その後文化革命で批判され、68年獄死。二人は、残念ながら不慮の死に遭ったのです。

▶「売国奴と呼んでください」

1937年7月28日、日本の陸軍は華北で総攻撃

を開始し、8月13日には海軍が上海で中国軍に攻撃を加えました。8月15日には、日本政府は南京政府を「断固懲^{ようちやう}する」という声明を出し、首都南京を攻撃しました。それを見たテルは日本のエスペランティストたちに公開の手紙を書きました。

友人知人に、検閲を思って手紙を出せなかったことを記した後、このように書きました。

「みなさん、自分がどんな民族に属していようと、人間らしい心明晰な理性をもっている人ならば、かならず中国に同情するでしょう。私は畜生ではありません。私もまた正義について学びました。それで、私の頭から、たえずつぎのような疑問がはなれないのです。——いったい、私はなにをなすべきなのか？ある同志たちのように、戦線におもむくべきか。それとも、婦人の同志たちのように難民や戦傷兵たちのために働くべきなのか。

しかし、私にはそれはできません。なぜなら、私は中国語を話すことさえろくにできない無力な女性なのでから。

たださいわいにして、私はエスペランティストです。そうです。「さいわいにして」と私は言います。なぜなら、私がこの日本帝国主義と戦う革命的な闘争のなかに小さな持ち場を見つけることができるのは、エスペラントのおかげだからです。(中略)

私がペンを手に入れば、心のなかには抑圧された正義を思う熱血が煮えたぎり、野蛮な敵にたいする怒りが火のように燃えあがるのです。また、私の心は中国の民衆とともにあるという喜びにみたされるのです。

お望みならば、どうぞ私を売国奴と呼んでくださっても結構です。私は、これっぽっちもおそれはしません。むしろ、私は他民族の国土を侵略するばかりか、なんの罪もない無力な難民の上に、この世の地獄を現出させて平然としている人びとと同じ民族のひとりであることを恥とします。ほんとうの愛国主義は、人類の進化とけっして対立するものではありません。でなければ、それは排外主義なのです」。